

白と黒の殺意

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エマとスージーには共通の不安があった。その不安を払拭するために、二人は画策を練った。

5	4	3	2	1
18	14	10	5	1

目次

バーボンのボトルを空にしたフアドは、やがてゴリラのような鼾をかき始めた。

今だっ！

心の中でスタートの合図があった。エマは、ベッドのタオルケットの中に用意していたボストンバッグを掴むと、同時にTシャツとGパン、スニーカーを履いた体を起こした。

抜き足差し足でフアドのベッドを横切ろうとした瞬間、鼾が止まった。ギクツとして、咄嗟にフアドを見ると、カーテンから漏れる街灯の中に、寝返りを打ったフアドの目を閉じた顔があった。

ホッと胸を撫で下ろすと、そのままじっとして、次の鼾を待った。だが、横を向いたせいとか、寝息を立てるだけで、なかなか鼾はやって来なかった。

……でも、熟睡しているはずだ。

エマは再びスニーカーの爪先を立てると、ドアを目指した。そしてノブを握るとゆっくり回し、引いた。

ギイツ！

甲高い軋み音がした。途端、

「うっう〜」

フアドが痰が絡んだような声を発した。咄嗟に振り向くと、フアドはまた寝返りを打って仰向けになった。間もなくして、再びゴリラのような鼾が始まった。

鼾をかくタイミングに合わせて、再びノブを引いた。鼾は止まなかった。安心すると、急いでアパートを出た。フアドの呪縛から逃れるために、脱獄囚のように疾走した。

ー丁度、発車寸前のバスがあった。エマは行き先も見ないで飛び乗った。

……どこへ行くのか？

当てなどなかった。車窓に映る疎らな乗客たちは旅慣れているの

か、周りのことには無関心で眠りに就いていた。エマは、窓に映る悲しい目をした自分の顔を見つめると、やがて、目を閉じた。

安堵あんどの眠りから目覚めると、外は白々としていた。見たこともない町並みが車窓を流れていた。エマが飛び乗ったのは、フロリダ行きの長距離高速バスだった。

着いたのは、シャインタウン Shine Town という人通りの多い賑にぎやかな町だった。腹が空いていたエマは、停留所の前にある カフェ&Bar Nice に入った。しゃれたエプロンをつけたウェイトレスが、窓際に座ったエマにメニューを手渡して、笑顔を向けた。

「ハーイ、ご注文は？」

少し年上だろうか、愛嬌あいきょうがあった。

「パンケーキとコーヒーのセットを」

メニューも見ないで即答した。

「ベーコンとハムがあるけど、どっちがいい？」

友だちにでも話すような物の言い方だった。

「じゃ、ベーコンで」

「オツケー。すぐ持ってくるわね」

愛嬌を残して背を向けた。時間が早いせいか、客は疎らで、浮浪者風の中年男や早起きの近所の老爺ろうやだった。

「お待たせ」

窓を向いていたエマの前にトレイを置くと、

「旅行？」

と、椅子に置いたポストンバッグを見た。

「え？ええ、まあ」

「ステキな町よ。私が休みなら案内してあげたいくらい」

黒いカチューシャがブロンドの髪にマッチしていた。

「私、スージー。よろしく」

握手を求めてきた。

「私はエマ」

スージーの手を握ると、笑顔を向けた。

「ね、もし時間があつたらテルちようだい。友だち募集中なの。今、番

号書いてくるから」

「ええ」

腹が鳴っていたエマは、スージーが背を向けた途端、パンケーキにかぶりついた。ー

〈Nice〉を出ると、散策に出掛けた。駅周辺は賑やかだが、郊外に行くとも閑静な住宅地が広がっていた。川のほとりには草花が咲き乱れ、一日中眺めていても飽きないほどだった。

……こんな美しい地で暮らせたらどんなに幸せだろう。小汚ないブロンクスとは雲泥の差だ。

スージーから退店時間を聞いていたエマは、時間を見計らって電話をしてみた。

「よかったら、私の部屋に来ない？」

スージーが気安く招いた。ースージーから聞いた道順を行くと、比較的新しいこぢんまりとしたアパートに着いた。ノックすると、例の愛嬌で迎えた。

studioの部屋は、花柄のカーテンやクッション、ベッドカバーで統一され、小綺麗に片付いていた。

「夕食を一緒にしない？何か作るわ。それとも、外で食べる？」

「どっちでも。スージーに任せるわ」

「オツケー。さて、何を作ろうかしら」

スージーは真新しい冷蔵庫を開けると、独り言のように呟いた。キャスター付きのワゴンに載った小型テレビからはジョン・レノ○の『イマジ○』が流れていた。

「ー私もまだ半年ぐらいよ、ここにやって来て。町が気に入って、いつの間にか居着いちゃったって感じ」

フォークでサラダを突つつきながらエマを一瞥した。

「確かに、いいところ」

ビーフステーキをナイフで切りながら、エマが微笑んだ。

「でしょ？・エマもこの町に住めばいいのに」

「でも、家賃とか高いでしょ？・」

不安げに訊いた。

「ね？・この部屋に住めば？」

閃いた目を向けた。

「えっ？・」

「ベッドを買うだけだし、家賃も半分で済むじゃない」

積極的だった。

「……けど」

エマは躊躇した。

「もちろん、プライバシーは侵さないわ。ね、そうしましょうよ。エマ

となら気が合いそうだし」

結局、エマはスージーと同居することにした。

スージーに誘われて同じ店で働くことにしたエマは、禿頭とくとうの店主、ジョセフを紹介された。ジョセフは好好爺こうこうやと言った感じで印象は悪くなかった。即決採用されたエマは、翌日から店に出た。

店はランチとダイナーの時間帯が忙しく、レジも兼ねているので、エマは計算ミスがないか心配だった。その上、メニュー名や値段も覚えなくてはいけない。

スージーとエマは17時までの早番で、17時からは遅番が出勤する。その一人にステイブがいた。歳は25、6だろうか、体育系のがっちりした体格だった。

「おはよう、エマ」

キッチンキッチンの裏で帰り支度をしていると、出勤したステイブが声をかけた。

「あ、おはようございます」

「少しは慣れた？」

人懐っこい笑顔だった。

「ええ、おかげさまで」

「今度の休み、デートしない？」

ロッカーから白いエプロンを出した。

「えっ？」

「ドライブでも」

「……考えとくわ」

ピンクのエプロンをロッカーに入れると、エマはポシエツトを肩に掛けた。

外で待っていると、伝票の整理にもたついていたスージーが出てきた。

「お待たせ！ね、たまには飲みに行こうか」

スージーは乗り気だった。

「私、まだ未成年よ」

「大丈夫よ、私と同じ歳に見えるわ。私のメイクが上手だから」
「……けど」

「ね、ね、行こう」

腕を引つ張った。ー連れて行かれたのは、〈FANCY〉という、
マスターが一人だけの小さなカウンターバーだった。

「ニック。紹介するわ、ルームメートのエマ」

「……初めまして」

「どうも、いらっしやい」

30過ぎてるだろうか、愛想は良くないが、何気に哀愁を感じさせる
雰囲気があった。

「私はジントニック。エマは？」

スージーはそう言って椅子から降りると、ジュークボックスのほう
に行つた。

「……何かアルコールの弱いものを」

「じゃ、カクテルを作つてあげよう」

グラスにボトルを傾けながら、エマを見た。

「ええ」

スージーに目をやると、ジュークボックスから響くロックのリズム
に合わせて踊っていた。エマと背格好がよく似たスージーは、スリム
なボディをしなやかに動かしていた。その様子を眺めながら、カウ
ンターの隅に座つた初老の客がグラスを傾けていた。ニックもシェイ
カーを振りながら優しい眼差しを向けていた。

「はい、どうぞ。〈blue sigh〉という、ウオツカをベースに
した俺のオリジナルだ。飲んでみて」

青い液体が入つたカクテルグラスをエマの前に押した。

「できた？」

スージーが戻つてきた。

「わあー、キレイな色」

カクテルのことを言った。

「じゃ、乾杯！」

エマが手にしたグラスに自分のグラスを当てた。

「何に乾杯しようか……そうだ、入店祝いと友だちになったお祝いに」
「ありがとう」

「よろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

「ね、ニツクもいつもの飲んで」

スージーが向きを変えた。

「じゃ、遠慮なく」

「ここは私のオアシス。くつろげると言うか……客が少ないからかも。ふふふ」

エマの耳元で小さく笑った。ニツクはビールの栓を開けていた。

「ニツクはビール党だもんね」

スージーは頬杖をつきながらニツクを目で追っていた。

……スージーはニツクのが好きなのかも。エマは思った。――駄弁^{だべ}ったり、踊^だったりして、エマは楽しい時間を過ごした。閉店までいると言うスージーを残して、エマは先に帰った。――スージーはその夜、帰ってこなかった。……ニツクの部屋にでも泊まったのだろう。

出勤すると、鼻歌交じりでモップを動かすスージーがいた。

「ご機嫌ね」

冷やかした。

「まあね。うふっ」

スージーは意味深な含み笑いをした。――その日は珍しく客が少なかった。暇潰しに窓から往來を眺めていると、店内を窺^{うかが}う中年の男が見えた。その男を見た途端、スージーは目を丸くすると慌ててキッチンに隠れた。スージーの様子にただならないものを感じたエマは、男の挙動に目を据^すえた。すると、男は店に入ってきて、キッチンを覗き込みながら奥のテーブルに着いた。

「いらっしやいませ」

お冷を置いた。男はエマを一瞥すると、

「コーヒー」

と、つつけんどんに言った。年季の入ったボストンバッグを横に置いた男は、薄汚れたYシャツの袖を捲っていた。

……スージーとこの男の関係は？エマは男を見下ろしながら、ギリシヤ鼻を睨んだ。

「な、ここにスージーっていないか？」

「えっ？」

男の不意打ちに、エマは答えに迷った。

「……いいえ、いないわ」

「偽名を使ってるかもしれないな。ブロンドで、ブルーサファイアの瞳をした21、2の女だ」

「……いいえ。もう一人は今日はいないわ。それにブラウンの瞳に茶髪よ。歳は30過ぎてるわ」

エマは適当な話をでっち上げた。

「……じゃ、ここにはいないか。だが、一応確認しとくか。その女はいつ出勤するんだ」

「誰が？」

「もう一人の女だよ」

「あら、今もいるとは言っていないけど」

「……どういう意味だ」

「茶髪がいたって言ったのよ。辞めたわ、1週間前に」

「辞めた？」

「ええ」

「で、どこに行ったか知ってるか？」

「いいえ。でも、電話をくれるかも。そしたら教えましょうか」

「ああ」

「どこに連絡すれば」

「いや。まだ泊まるところ決めてないんだ」

「だったら、ACE INNS^{エース}^{イン}っていうモーテルがおすすすめよ。安いし、キレイだわ」

「じゃ、そこにするか」

「お名前は？」

「デッブだ」

「じゃ、モーテルに着いたら、部屋番号を教えてください。今、電話番号書くから」

「ああ」

エマは店の電話番号と自分の名前をメモると、デップと名乗る男に渡した。デップが店を出ると、エマは急いでキッチンに入った。スージーはキッチンの隅に蹲うすくまっていた。

「立ちくらみらしい。早退しなつて言ったんだが」

フライパンを動かしながら、ジョセフが心配そうな顔を向けた。

「スージー、大丈夫？」

スージーに駆け寄ると、背中に手を置いた。

「……大丈夫」

小さく呟いたスージーの横顔は青ざめていた。そこには、いつもの明るいスージーの姿はなかった。

「……帰ったら話してくれるよね？何もかも」

耳元で囁ささやいたエマの言葉に、スージーはゆっくりと頷うなずいた。――その翌日、エマは店を休んだ。

エマが休んだ翌朝、モーターへACE INNの一室から男の刺殺しせつたい体が発見された。第一発見者はモーターの主あるじ。チェックアウトの時間が過ぎても出てこないで不審に思いドアをノックしたが応答がなかった。鍵が掛かってなかったので部屋を覗くと、背中を赤く染めた被害者がベッドに倒れていたとのことだった。また、主は前日の午後3時ごろ、被害者の客室から出て行く女を目撃したとのこと。「で、どんな女でした？」

刑事は手帳を開いた。

「どんなつて……横顔がチラツと見えただけだから」

「いくつぐらい？」

「さあ……22、3かな。ブロンドの髪が印象的だった」

「白人？黒人？」

「もちろん、白人ですよ」

——所持品の運転免許証から被害者の身元が判明した。アルバー
ト・デツプ、42歳。警察は、娘のスージー・デツプ、21歳にたど
り着くと、取り調べた。だが、死亡推定時刻の午後3時は店で働いて
いたことが、店主や客の証言により立証された。事件当日、店を休ん
でいたエマ・バーナード、19歳は除外された。モーテルの主の証言
に、客室から出てきた女は白人、とあつたからだ。エマ・バーナード
は黒人だった。——金銭トラブルか何かで売春婦と揉めて殺された
のだろう。それが刑事の見解だった。間もなくして、エマとスージー
は店を辞めた。

——2年近くが過ぎていた。エマはステイブと結婚して男児を
儲けていた。だが、そんな幸せな生活に暗雲が立ち込めた。フアドに
見つかってしまったのだ。

「エマちゃん。幸せそうだね」

薄ら笑いのフアドの顔が受話器の向こうに見えるようだった。

「……どうして、ここが分かったの？」

「どうして分かったかって？そりゃあ、捜したからさ。お前が持って
た金はたかが知れてる。バス代か電車賃ぐらいだ、飛行機には乗れな
い。あの時間に乗れるのは、この町行きのバスだけだ」

「……」

「さて、どこに隠れてるかと考えた結果、手っ取り早く働くにやウエイ
トレスぐらいだろうと、喫茶店やレストランを訪ね歩いたら、*Nice*
*e*の客がご親切に教えてくれたってわけさ。すぐに連れ戻すことも
できたが、それじゃ、一銭の得にもならないからな。金になるまで
待つてたつてわけさ。だが、旦那が*Nice*のコックじゃ大した
金にはならないがな。もう少し金のある奴と所帯を持つてほしかつ
たが、ま、贅沢を言ったら切りがねえか」

「……」

「と言うことで、少しばかり金を都合してくれねえか」

「そんなお金ないわよ」

「お前になくても旦那にはあるだろ？お前が言えないなら、俺から

言ってやろうか？俺たちのー」

「やめてーっ！」

「じゃ、自分から頼み込むことだ、愛する旦那に」

「……分かったわ。何時にどこに持って行けばいいの？」

「お利口さんだね、エマちゃんは。それじゃ、時間と場所を言うよー」

翌日の午後3時ごろ、男の水死体が公園の池から発見された。第一発見者は、公園をジョギングしていた若い男だった。背中^の傷から、鋭利な刃物で刺されたのちに池に突き落とされたものと推測された。また、この発見者は、被害者と一緒にいた若い女を見ていた。

「どんな女？」

刑事は手帳を開いた。

「アフロヘアの」

「アフロ？黒人？」

「ええ」

被害者の身元は齒型によって判明した。フアド・バーナード、42歳。娘のエマ・バーナードにたどり着いた刑事は取り調べた。だが、事件当日、エマには完璧なアリバイがあった。主婦仲間の親睦^{しんぼく}パーティーに参加していたのだ。参加者10名全員の証言は一致していた。

……2年前にも似たような事件を担当したな。あれは白人だったが、今回は黒人だ。どっちも父親が殺されている。そして、どっちにも完璧なアリバイがある。違うのは一方は白人で、もう一方は黒人と言うことだ。

刑事は2年前に遡^{さかのぼ}ることにした。〈Nice〉の店主、ジョセフから収集した情報で、2年前の殺人事件に、スージーの紹介で〈Nice〉に入店したエマが関わっていると確信した。そのことを明白にするには、スージーをもう一度取り調べる必要があった。だが、ジョセフもエマもスティーブも、スージーの居場所は知らないとのことだっ

た。

……ここで足取りが途絶^{とだ}えるのか？……いや、エマはスージーの居場所を知っている。事件直後の同時期に一緒に店を辞めたぐらいだ、余程仲が良かったに違いない。仮にエマとスージーが共犯だとしたら、必ず連絡を取り合っているはずだ。エマ宅の通話履歴を調べるか。だが、仮に二人が共犯だとして、どんな方法で互いの父親を殺したんだ？二人には完璧なアリバイがある。

……ん？ちよつと待てよ。2年前の事件の時、第一発見者の、見かけたのは白人の女、との証言で、黒人のエマを取り調べなかった。ここに落ち度があったのでは？……白と黒。――あつ！そうか。

刑事は自分の閃きに自信を持つと、エマを再度取り調べることにした。

「奥さん。あんた、ニック・スミスに頻繁に電話をしているね」

「……」

「何者だい、この男は」

「……以前、飲みに行ったことがあるバーのマスターです」

「そうだよ。〈FANCY〉というバーのマスターだよ。なんでまた、そんな男にしょっちゅう電話してるんだ？ 旦那も子どももいる既婚者のあんたが」

「……2年前、初めて会った時から好きでした。でも、彼は白人。どうせ付き合ってくれないだろうと思って、気持ちを打ち明けませんでした。……でも、今でも忘れられなくて、声を聞けるだけでいいんです。ステイブがいない時に電話をしました」

俯うつむいて語るエマの話には真実味があった。だがその台詞せりふは準備していた台本だと判断した。

エマを帰したその日の夕刻、ニックが店に出て誰もいないはずのアパートを見張った。ー間もなくして、ニックの部屋から女が出てきた。顔を見た途端、刑事はアツと心の中で叫んだ。読みが的中したからだ。声をかけると、スージーはびっくりした顔を向けた。

「覚えてますか？ 私のことを」

その問いに、スージーは小さく頷いた。

目の前にある公園に誘うと、街灯が照らすベンチに腰を下ろした。ふと見上げると、空は淡い紫色に染まっていた。

「エマとは連絡を取ってる？」

「いいえ」

スージーははっきりと言い切った。

「どうして？ 友だちだったんでしょ？ 〈Nice〉で一緒に働いていた

頃は」

「ええ。でも、嫌いになったんです」

「どうして」

「私の彼のニックにモーションをかけたことを知ったからです。友だちだと思っていたのに、私の彼を横取りしようとしたことが許せなかった。だから、絶交したんです」

丸暗記した台詞を喋っているように刑事には聞こえた。スージーもまた台本を用意していたようだ。

「……なるほどね。けど、エマはあんたの恋人のニックと今でも連絡を取り合っているよ」

「えっ？うそよー」

わざとらしく驚いた顔を向けた。

「うそじゃない。エマ宅の通話履歴でニックの名が浮上、それでアパートが判明し、こうやって、同棲しているあんたを取り調べるまでに至ったわけだから」

「チキショー！あの女。亭主も子どももいるって言うのに、私の彼にちよつかいを出しやがって。亭主にばらして、離婚させてやろうかしら。ったく」

スージーのその汚い言葉は演技だと、刑事は見抜いていた。

「さつき、エマとは連絡し合っていないって言ったよね？」

「……ええ」

「なのはどうして、子どもがいることを知ってるの？」

途端、スージーは狼狽うろたえた。

「……それは、〈Nice〉にいたところからステイブと付き合ってたのは知ってたから、あれから2年も経ってれば結婚して子どももいるだろうと推測して……」

お茶を濁すかのように早口で捲し立てた。

「……なるほど、推測してね……エマの父親が死んだのは知ってる？」

「……いいえ。新聞は読まないから」

目を逸らした。

「どうして、新聞が関係あるの？」

「えっ?」

言ってる意味が理解できない様子で顔を向けた。

「どうして、エマの父親の死が新聞に載ってると思ったの?」

「えっ?」

目を丸くした。

「死んだと言っただけで、殺されたとは言っていない」

「……それはつまり、2年前に私の父が殺されたから、そのことが頭の隅にあつて、たぶん殺されたんだと思い込んで」

「先入観てヤツ?」

「……たぶん」

「ところで、×日の午後3時ごろ、どこで何をしてた?」

「×日ですか?」

「そう」

「……部屋にいたと思いますー」

スージーにはアリバイがなかった。仮にニックが、‘スージーと一緒に部屋にいた’と証言しても、恋人の証言は信用性が低い。完璧なアリバイにはならない。いよいよ、刑事の読みが色を濃くした。

刑事の見解はこうだ。スージーの父親を殺したのはエマで、エマの父親を殺したのはスージー。つまり、【交換殺人】だ。肌の色こそ違えど、二人は背格好が似ている。その方法はメーキャップとかつら。黒人のエマはライトナチュラルのファンデーションとブロンドのかつらで白人に扮した。その逆に、白人のスージーはブラウンのファンデーションとアフロヘアーのかつらで黒人に扮した。そして、アリバイを完璧にするために目撃者を作ると、ブロンドやアフロなど、わざと目立つ髪型を印象付けた。

交換殺人を確信した刑事はその夜、エマの自宅を訪ねると、鎌をかけてみた。

「スージーが自白したよ」

「えっ!」

エマが目を剥いた。

「交換殺人のからくりを」

「……」

エマは俯いた。

「スージーの父親を殺したのは、白人に扮したあんたで、あんたの父親を殺したのは、黒人に扮したスージーってことを」

「……」

刑事の読みが凶星であることを教えるかのように、エマは身動きみじろ一つしなかった。

「最初から話してもらおうか」

覚悟を決めたのか、エマはため息をつくど、ソファに深く座り直した。

「2年前、一人の中年男が店にやって来たのがすべての始まりでした。その男を見た途端、スージーの顔色が変わったんです。話を聞くと、その男は父親で、その父親が怖くて逃げてきたと。そして、私と同様に虐待されていたことを知りました。スージーを父親の呪縛から解き放してやりたかった。いつもの明るいスージーに戻してやりたかった。だから、殺害する方法を考えたんです。それしか、スージーが幸せになる道はないと思ったから。」

あの日。店に電話を寄越したスージーの父親、アルバートからモーターの部屋番号を聞き出すと、『明日、スージーの友人が直接モーターに行く』と伝えました。

翌日、スージーの上手なメイクで白人になった私は店を休みました。アルバートと会う約束の午後3時までの間、指紋がつかないように指先に透明のマニキュアを塗ったり、返り血を浴びても目立たない服選びをして、部屋で待機していました。

そして、約束の時間にモータールに行きました。ノックのあとにドアを開けたアルバートは、私が昨日話をした〈Nice〉のウエイトレスだとは思いません、安易に部屋に入れました。

『スージーの友だちよ。リサ。よろしく』

私だとばれないように、故意に片言の英語を使いました。

『スージー、あとで来るね』

『えっ?ここに来るって?』

予期せぬ朗報に、アルバートは喜んでいました。

『スージーに、サービスするよう言われた。私、マッサージで働いてるね。パパさん、マッサージするね』

『えっ?マッサージしてくれるのか』

『するね。ベッド、横なって』

私の話を信じたアルバートは、ウキウキ気分ですぐにベッドに俯せうつぶせになりました。私は馬乗りになると、片手でアルバートの背中を優しく撫でながら、ポケットからフォールディングナイフを出すと、なんの躊躇ちゆうちゆうもなく、背中に突き刺しました。アルバートは小さく唸うなると、やがて動かなくなりました。枕をあてがいながらナイフを抜くと折りたたんでポケットに仕舞いました。

なんの躊躇ためらいもなくこんな大胆なことができなんて、自分でも驚きました。それはたぶん、スージーの父親への憎しみが自分の憎しみのように感じたからだと思います。私は、自分の父親を殺した思いでした。

客室を出ると、目撃者を作るためにわざとヒールの音を響かせました。自分の身を守るためと、スージーのアリバイを完璧にするには、アルバートの死亡推定時刻に客室から出てきた‘白人の女’を印象付ける必要があったからです。明るい時間に犯行に及んだのもそれが理由です。

私たちが〈Nice〉を辞めたのは、事件に関わっていることを周

りに気付かれないようにするためです。いつなんどき余計なことを喋って墓穴を掘るか分かりません。そのことを恐れて辞めました。そして、事件は迷宮入りになった。

私はステイブのアパートに移り、スージーはニツクのアパートに移りました。そして、ステイブと結婚した私は子どもをもうけました。幸せに暮らしている時に、私の父親、フアドから電話があったんです。あまりの恐ろしさで目の前が真っ暗になりました。連れ戻されたら奴隷のように扱われ、死ぬまで暴力を振るわれるのは目に見えています。今の幸せを失いたくない。

私はニツクと同棲しているスージーに相談することにしました。電話で事情を話すと、『私に任せて。明日の3時に公園の池で会う約束をして。あなたは午後3時の完璧なアリバイを作っておいて』そう言ってくれたんです。私は涙が溢れました。スージーの力強い言葉が嬉しくて。フアドから聞いていたホテルに電話をすると、スージーに指示された時間と場所を伝えました。そして翌日、近所の主婦たちのパーティにベビーカーの息子と一緒に参加しました。そして、私がケーキを食べながら近所の主婦たちと会話を弾ませている頃にフアドが殺された……」

話し終えたエマは、深いため息をつくとうなだ垂れた。――

スージーからも話を訊くために、刑事はその足でニツクのアパートに引き返した。エマから電話があったのだろう、ドアを開けたスージーは刑事の訪問を予期していた顔の様子だった。

「あの日、エマから電話をもらった私はアフロのかつらを買いに行きました。黒人に扮装する目的で。翌日、公衆トイレで黒人の格好をすると、瞳の色を隠すためにサングラスをして約束の時間にフアドに会いに行きました。」

『フアドさん?』

ベンチから腰を上げたフアドは、エマから聞いたとおりの大男でした。

『そうだけど』

『私、エマの友だちでオリビアと言います。子どもの具合が悪いので病院に行くから少し遅れると伝言を頼まりました』

『そうかい。わざわざすまないな』

無精ひげのフアドが前歯を覗かせた。

『いいえ。ステキな所ね。風が爽やかだわ。あらっ、あれは何かしら？』

池のほとりに立つ大きな柳の木に隠れると、独り言のように呟きました。

『何か動いてる』

『どれ？』

フアドは傍らかたわに來ると、腰を曲げて池を覗き込みました。

『その水草の下』

と指を差しました。

『えっ？どこだ？』

フアドはそう言つて前のめりになりました。

『そこです、そこ。水草のそこ』

私はそう言いながらポシエツトからジャックナイフを出すと両手で持ち、力を込めてフアドの背中を刺しました。そして、フアドの腰を片足で押すと同時にナイフを抜きました。フアドは低い唸りうな声を発すると、池に落ちました。生い茂る水草がクッションになったのか、水音は鈍く聞こえました。水面を赤く染めながらフアドは暫くもしばがいていましたが、やがて動きを止めました。柳の木が目隠しめかくになって、フアドの水死体に気付く者はいませんでした。私は公衆トイレでブラウンのファンデーションを落とし、アフロのかつらを外すと、アパートに帰りました……」

すべてを打ち明けたスージーは、ゆっくりと顔を上げた。

「刑事さん。子どもは親の言いなりになるのが義務なんではないでしょうか？ 子どもは、……幸せになつてはいけないんでしょうか？」

スージーの目には涙が溢れていた。

「……いや、そんなことはない。子どもは親を選べない。それが何より不幸だ。しかし、誰しも幸せになる権利があります」

刑事は真剣な眼差しを向けた。

「……刑事さん」

逮捕される覚悟をしていた二人だったが、秋が深まる頃になっても刑事はやって来なかった。

「あの刑事さん、口は悪かったけどキレイだったね」

スージーがエマに電話をした。

「ほんとに。それにハートも優しかった。なんかお母さんと話してるみたいでほんわかした」

「だね。エマも私もお母さんいないから、あんなお母さんがいたら、幸せだったね」

「そうだね。また会って話したいなあ」

「私も。ね、どうして私たち逮捕されなかったの？」

「……分かんない。刑事さんが迷宮入りのままにしてくれたのかな？」

「もしそうなら、感謝しないとね」

「うん。……ほんとに」

「私たちを幸せにするために、迷宮入りのままにしてくれたんだよ、……きつと」

そう言ったあと、受話器の向こうから無邪気な子どもの笑い声が聞こえてきた。スージーは幸せを噛み締めるかのように小さく微笑んだ。――

完